
破壊のルアンレーネ～全ての物語はスベテノセカイ～

多槍和時

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

破壊のルアンレーネー全ての物語はスベテノセカイ

【Nコード】

N8406X

【作者名】

多槍和時

【あらすじ】

怠惰で無感動な日々を送る高校生、静名響児。

彼は唯一の心の支えは、昔書いていた『物語』とそれを読んできた唯一の友人、『読者』との思い出だけだった。

そんな彼はある日、見たことのない醜悪な化物に襲われる。

そんな彼を救ったのは真紅の装甲服アーモードレスに身を包んだ美しい少女だった。

戸惑う響児に少女は告げる。

「私もこの化物も、あなたが創造した物語に生きる存在」

少女も化物も、かつて響児自身が書いた物語の登場人物だという。
戸惑う響児に少女は告げる。自分は地獄となった物語の世界を、
物語の『創造主』たる響児に修正させる事が目的だと。

かくして、響児は自分の書いた物語と『読者』との思い出に再び向きあうことになるのだった。

一、覚え無き物語

プロローグ

目の前に転がっている肉塊。それが人間の物でないということは明白だった。

全身を覆う鱗状の皮膚。長さの揃わない奇妙な指の先端から生えた鋭い爪。真つ二つに両断され、漆黒の血液らしき液体が流れ出している胴体には、底の見えない洞窟を思い浮かべせるが、左右非対称に幾つも存在している。

頭部らしき部分には目と思われる裂け目が左に一線。右には胴体に存在していたような、虚ろな穴。そして口らしき物は針と糸で縫い付けられたような跡が残っていた。

怪物。そう呼ぶに相応しかった。それも恐ろしく醜悪な。

作り物の類で無い事は明白だ。ピクピクと小刻みに動き、作り物が醜さの中にもある程度の規則性をもった形をしているのに対して、少年の目の前で異臭を放つそれは、整然さも様式美も存在しない。人間が創造したという痕跡が全く見当たらない、ただひたすら醜悪な存在だった。

それについ先ほどまで、少年は目の前の異形に殺されかけていたのだ。突如路地裏に連れ込まれ、首を締め上げられて宙に浮かされ心臓を貫かれる刹那、宙に浮いた少年の身体は支えを失って、硬いアスファルトの上に落下した。

首を締め上げられていたせいで満足に呼吸できなかった苦しさ、下半身をアスファルトの地面で打った痛みにしばらく呻き、なんとか目を見開いてみると、異形の存在は胴体を両断されていた。それがついさっき起こった出来事。その事実が目の前の肉塊が作り物等ではなく、意思を持った何かというなよりの証明だった。

正直、何が起こったのか全く理解できなかった。

だが襲われた時の痛みと、無残に転がっている異形の肉塊が放つ異臭が、眼前の光景が現実である五感に訴えかけていた。

「何が起こったか分からない、って顔ね」

ふと、少年に語りかける声があった。少年は反射的に声のした方に目を向ける。

醜悪な肉塊の向こうに立っていたのは、一人の少女。

年齢は少年と同世代ぐらいだろうか。年相応に整った胸腺を無駄な装飾が一切ない長袖のブラウスが包み、踝まで覆うまっすぐな線を描くスカートにはスリットが存在して足を幾重に皮ベルトで巻くズボンが覗く。そしてその先の編み上げブーツや細い指に絡んでいるグローブに至るまで、艶の無い真紅で統一されていた。

さらにはその真紅の衣装の至る所、胸部、腕、スカート等の各所には鈍い光沢を放つ幾つもの金属片、装甲が取り付けられている。

ドレスの優美さと甲冑の堅牢さを持つ衣装は、アーマードレス 装甲服とでも言うべきだろうか。

そんな真紅で覆われた中で唯一、うなじに掛けられて胸の両側から風になびく漆黒の、スカーフともマフラーとも付かない大きな布が異彩を放つ。

そし現実離れしているのは、真紅のアーマードレス 装甲服だけではない。

少女はとても綺麗な顔立ちをしていた。テレビで見かけるタレントやモデル達を持つ、

ある種毒々しい美しさはなく、清らかな水のように透き通った美しさを感じさせるものだ。左側で一つに束ねられ腰まで伸びた髪の色は、人工的な着色などで絶対に表現できないだろう、陽光を思わせる金色。柔らかそうだが強く結ばれた唇。

そして最も印象に残るのは、この異常な状況にまったく動じた様子が無い、覇気に満ちた大きな左右の瞳だった。

左が淡い水色で右は対象的に暖かな橙色。決して人工物の美しさでは無い。少年を襲った異形の化け物がこの世の物で無い醜悪さだ

としたら、少女の美しさもまた現実には存在しないであろうものだった。

目の前には、美しい少女と醜悪な肉塊。対極に有るべき物が同時に存在していると言うべき光景に戸惑っている少年に少女は語りかけてきた。

「なんで自分がこんな化け物に襲われるか分からない。そんなところ？」

「あ、当たり前だろ……こんなの聞いた事も見たことも無い。なんなんだよコレは？」

胸中を見透かされた少年は、なんとか声を振り絞る。

「本当に分からない？」

「当たり前だろ！ だから一体何がどうなって……」

「コレは、貴方が創造したモノ」

少年の言葉を遮り、少女は静かに言い放つ。その言葉に少年は呆気にとられる。

「な、何を言ってるんだよ？ 俺が作った？ そんな覚えなんて無い。大体こんな化け物をどうやって作るっていうんだよ！」

少女の言葉を理解できず、激昂する少年を少女は冷ややかに見ていた。

「まさか忘れてしまったわけ？ あなたが創造した物語の事」

そう言った少女の口調は何処と無く、少年を咎めるふしがあった。そして、少女はさらに言い放った。

「私もこの化物も、あなたが創造した物語に生きる存在」

少女が言い放ったその言葉は完全に少年の常識の範疇を越えていた。

俺が作った物語？ それに生きる存在？ この娘も？ この化け物も？

「まだ理解できないようね？」

完全にパニックに陥った少年に少し呆れる様な口調で語りかけると、少女は化け物の残骸をまたいで少年に詰め寄って、顎に手をかけた。そして少年の瞳を真直ぐに見つめると、今だ状況を理解できていない少年を咎めるかのような口調で詰め寄った。

「今理解できなくてもいいわ。とにかくあなたにはあなたの創造した物語を、私達が生きる世界を修正してもらう」

少女はそこまで一気に捲くし立てると、今度は少し落胆したかのような声でつぶやいた。

「それにしてもあなたが私達の『創造主』？ 貧相な顔ね……」

一、覚え無き物語

放課後前のホームルームは無秩序の極みだ。

友人同士でお喋りに講じる者や、黙々と携帯やゲームの操作に没頭する者。教室に存在する誰もが好き勝手自由気ままに行動し、そのざわめきが、教壇の上から精一杯ホームルームを進行しようとする教師の声を掻き消していた。

(くだらない)

後ろの席の一角で、ナンパ談義に花を咲かせるクラスメート達の声が耳に入るたびに、静名響児はそう思っていた。

高校一年にもなってホームルームさえ満足に受けられない。彼らが騒ぐ声は耳障りなノイズとなって、余計に響児の不快感を増幅させる。携帯で音楽でも聴いてたり、ゲームでもしていればこの不快な感覚は紛れるのかもしれないが、響児はそういった行動を取りはしなかった。

真面目だからというわけではない。ただ単にそうした行為で教師達に注意され、目をつけられるのがわずらわしいからだ。教師だけではない。誰とも関わらず、淡々と過ごしていく。それが彼のスタンス。刺激も、感動もいらない。ただ惰性で生きていければいい。

（何時からだっけ？　こんな風になったの）

十七歳という年齢の割りにはあまりにも矮小な己の生き様を、響児は振り返ってみる。

以前はこうではなかった。嬉しい事も楽しい事もあった。

（そう……あれは……）

記憶の中から、何かを掴み取ろうとした瞬間、終了を告げるチャイムが鳴り響く。

それが鳴り終わるかならないかの内に、生徒達は一斉に立ち上がり、壇上の教師の静止も聞かずに教室から各々散っていく。

響児は不快音のオーケストラが終了した事に安堵したと同時に、記憶への旅路を邪魔されたという新たな不快感を得てしまう。

そのやるせない気分を払拭するかのようになんと黙々と帰り支度を始める彼に、ふと柔らかな声が響いた。

「静名君？　ちよつといいかな？」

控えめながらも明るく間延びした声。先ほどのホームルームを懸命に仕切ろうとしていた担任の女教師、三沢のものだった。

少し明るめに染めたポニーテールと陽気そうな笑顔が印象的な、まだ大学をでたばかりの国語教師で今年の春から担任を任されている。そんな彼女は響児に向かって少し首をかしげて様子を伺っていた。

「なんか…話ですか？」

面倒くさそうなニュアンスを含んだ、気だるげで適当な声で返事をする。

「うん？　何か用事でもある？」

「いえ……別に」

「だったらさ。ちょっと先生の話に付き合ってくれないかな？」

面倒くさそうな響児の言葉を全く気にしない三沢は、脇に挟んだ数枚の原稿用紙を響児の目の前に差し出しながら明るく言い放った。

「ねえ、文芸部に入らない？　先生が顧問してるトコ」

「……文芸部？」

唐突な三沢の言葉に響児はいぶかしげな表情を向ける。三沢はそんな彼を全く気にせず、手にした原稿用紙をめくりながら、懸命な様子で語りかけてくる。

「この間の授業で書いてもらった、静名君の小論文と読書感想文なんだけどさ、先生感心しちゃったんだ。読書感想文とか。この間の授業でやった『鏡の中の声を』が例題だったでしょ？ みんなおざなりなのしか書かないけど、静名君は作中で主人公が語った心情以外にも、別の考え方を作者が伝えたかったって書いてたじゃない。面白い着眼点だわ。先生驚いちゃった。それに……」

「それが文芸部に入ってたのと、どう関係あるんですか？」
放っておけば何時までも喋っていきそうな三沢の言葉を響児は遮った。

響児は三沢が苦手、というより嫌いだった。

先程響児を存分に不快にさせた無秩序なホームルーム。その原因を作っているのは、他ならぬ三沢なのだ。

明るくて生徒にも親身に接して、そこそこ可愛い、童顔の新任女教師。三沢は本来ならば生徒達の人気を集める教師になれるはずだった。だが現状はホームルームでさえ満足に出来ない程生徒から軽く見られていた。というのも、彼女はことごとく抜けているのだ。

寝癖が直ってない箇所があるにも関わらず登校する。小テストの範囲は間違って生徒に伝え、その採点も幾つもミスをする。生徒達のノートを集めれば、廊下で転んで盛大にぶちまける等々……

少々ドジでも、明るく生徒に高圧的な態度でなければ、むしろ生徒から心配され人望を集める……なんて事は暢気で綺麗事だらけの空想の話だ。劣っている者が集団に居れば、疎ましがられて排斥される。

担任就任から二ヶ月ちよつと、梅雨が始まろうとしている六月頭で三沢は「三バカ」という苗字を振った蔑称を生徒達から襲名し、教師のヒエラルキーの最下層へと陥った。

だが彼女はそんな生徒達の蔑みも気にせず、健気に頑張っている。

響児を勧誘している行為もその一つだろう。

響児としてはそんな事より、ホームルームを静かに進行させる事に労力を使って欲しかった。

「文芸部ってね、本好きな子が集まって色んな本に色んな感想出しかうの。だから、静名君みたいな子が入れば面白くなるんじゃないかって」

「別に……あれは適当に書いてだけです。それが妙な風に先生には映ったんじゃないんじゃないですか？ 大体俺の国語の成績3ですよ」

なんとか自分を文芸部に引き入れようとする三沢の言葉を響児は、嫌々そうにあしらう。そんな彼に尚も三沢は説得を続けた。

「ううん、そんな事ない。国語の成績とは関係無いよ。静名君の国語力は高いわ。きつと今まで沢山本読んでいたんだよね。あんな面白い観想が書けるんだもん」

——響くんって面白いお話の読み方するよね

三沢の言葉を聞いた瞬間、響児の脳裏に懐かしい声が再生された。懐かしく優しい声。

それは彼の持つ記憶の中でも暖かいもの。無感動な日々を送る今の自分には縁のないものだった。

だがそんな彼の胸中を知る由も無く、三沢は陽気な声を崩さずに言葉を続ける。

「それに小論文も凄い。構成力や表現力が段違いだし。文芸部の子達って本の感想は言い合うんだけど、創作にあまり熱心じゃないんだよね。だから……」

「だから何が言いた……」

苛立ちを懸命に抑えながら、響児は三沢の声を静止しようとした。だが、そんな彼をよそに三沢は陽気な声で言い放った。

「静名君、文芸部に入って小説書こう？ 君なら面白い小説が書け

るわよ」

三沢の声が耳に飛び込むと同時に、再び懐かしい声が響児の脳裏をよぎった。

——響くんの作るお話って、とても素敵ね

その言葉を聞く度に、響児は嬉しく温かい気持ちになれた。その言葉を聞いていた時の自分は、今とは違った。ただ無駄に生きている人間ではなかった。

（けど今の俺は……もうあの声は戻ってはこない……）

それらの感情が胸に渦巻くと、自分でも驚くほど、抑揚のない声を絞り出した。

「小説なら昔書いていましたよ」

「え？ ホント？ だったらちようどいいじゃない！」

その返答がよほど嬉しかったのか、三沢は響児の言葉の含まれている憎悪に全く気付いていない様だった。

「どんなの書いてたの？ 誰かに読ませたりした？」

「小学校の頃。一人だけに読ませていました」

「で、で？ 評判はどうだったの？」

「面白いって言うてくれましたよ。よく続きを催促されましたし」

三沢はそれを聞くと手にした原稿用紙を小脇に抱え、空いた手で響児の手を握り締めた。

「いいよ！ すごくいい！ 小説書くのって面白いんだよね。先生もさ、新人賞に応募する小説書いてるんだ。一生懸命書いてるとき、その内登場人物達が勝手に動いて、セリフとか先生が考えないような物が飛び出してくるんだよね。ねえ今から部室行こ。そんで皆に……」

「昔書けたからって、今でも書けるとは限らないですよ？」

「そんな事無いよ。現にこの小論文とかが……」

「先生がいい例じゃないですか」

恐ろしく冷淡な声を響児は発した。

「え？ 何？」

今まで響児の悪意に気付かなかった、あるいは気付いていても平静を取り繕っていたのか、それまで陽気に響児を勧誘していた三沢の顔に明らかな戸惑いが浮かんだ。

そんな彼女の様子にお構いなしに、響児は言葉の毒を放ち続ける。「昔は順調に受験や採用試験を乗り越えたエリートでも、今は、赴任三ヶ月目で生徒達からバカ呼ばわりされて舐められる落ちこぼれ教師。それと同じですよ。オレが昔面白い小説を書けたからって、今も書けるとは限らないじゃないんですか？ 人に見せたら笑われて馬鹿にされる。そんな先生みたいになるのがオチです」

響児の醜惡な言葉に蝕まれた三沢の表情からは、完全に血の気が引いていた。唇は真っ青に染まり、ワナワナと振るえ、さっきまで明るく輝いていた瞳は輝きを失っていた。それでも尚教師の威厳を保つ為、それとも響児の言葉を否定したいが為か、三沢は氣力を振り絞って言葉を続ける。

「そ、そんな事無いよ。ホラ、静名君いつも一人じゃない。文芸部で友達ができたらいいんじゃないかなあって思って。やっぱ一年以上だから、皆の輪に入りにくいのかもあって思って……それに、お家から離れて一人暮らしだし、寂しいんじゃないかと思っ……」

響児との関係を修復しようとした試みた三沢の懸命の言葉は、響児の二つの忌々しいコンプレックスに火を付けた。そして、それは両者の関係を完全に破壊した。

「自分の事も満足に出来ない人に、余計な世話焼いて欲しくないです」

それが決定打だった。響児の言葉が終わらない内に三沢は彼に背を向けて駆け出して行く。響児は尚も躊躇なく無慈悲な言葉を彼女の背中に投げかけた。

「都合が悪くなると逃げるんですか？」

そこまで聞くと三沢は脚を止め、その場に座り込んだ。放課後の

教室には部活に向う生徒や帰宅する生徒達が幾人かいたが、肩を震わせて鳴咽を上げる三沢を嘲笑する者はいても、心配して他の教師を呼ぶものや、駆け寄って慰める生徒は誰一人として存在しない。

そんな彼女を見て何の感慨も沸かないのを確かめると、響児は教室を出ていった。

背後から聞こえてくる三沢の鳴咽は、先程のホームルームの雑音よりうっとおしかった。

夕方の五時に差し掛かろうとする駅前のロータリーは、帰宅するサラリーマンや学生でにぎわっていた。響児はその一角にあるベンチに俯いて座り、先程三沢に投げかけた言葉を思い返して後悔していた。

三沢の真つ青な顔と、彼女に投げかけた悪意の塊の様な言葉を思い出したびに、響児の額から汗が滴り落ちる。。

「なんであんな事をやってしまったんだよ？」

そう自分に問いかける。薄々は気付いていた。それは三沢の放った言葉。

——君なら面白い小説が書けるよ

その言葉によって昔、小学生の頃小説を書いていたという事実を呼び起こされた。

別に小説を書いていたという事実が不快だったわけではない。むしろ幸せな記憶だった。

しかしその幸せな思い出は、それと陸続きに起こった忌々しい事件も思い出させる。

それが原因で響児は一年留年し、さらには実家から車で数時間も離れた都内の高校に半ば追いやられる様に入学させられたのだ。

もっとも、実家から離れられた事は好都合だった。元々両親とは折り合いが悪かったし、地元も好きではなかった。

ただ、たった一人の自分の物語の『読者』と分かれるのが辛かった。

目を閉じてその『読者』がかけてくれた言葉を思い出す。

——響くんの作るお話って、とても素敵ね。私とっても楽しみにしてるんだから

目を閉じれば眩しい笑顔が浮かび、優しく懐かしい声が聞こえてくる。その声に存分に浸るとゆっくりと目を開け、大きく深呼吸をする。

「三沢先生には……明日謝ろう」

何も問題はない。また明日から誰とも関わらない、余計な衝突も喧騒も無い日々が続く。

そう結論を出すと、響児はベンチから立ち上がった。駅前のロータリーは相変わらず混雑しており、その雑踏を避けるように響児は自分のアパートへと家路を急いだ。

アパートへと帰る道に、響児は街の再開発計画から外れたシャッターの目立つ寂れた商店街を普段から選んでいた。雑音が少ないし、何より彼の苦手な人ごみから離れられる。

そんな人影もまばらな商店街を、二人の小学生の男女が駆け抜けていく。手には学校の図書室に置いてあるような、鮮やかな色彩の表紙の本を持っている。その光景は響児に再び懐かしい記憶を再生させた。

——他の人達なんかどうでもいいじゃない。響くんは私の大事な友達だよ

人通りの無い静かな商店街では、懐かしく優しい声が例えおぼろげな記憶でも、先ほどの雑音にまみれた学校や駅前よりは鮮明に思い出せた。

もう元には戻らない思い出。忌々しい事件に繋がる記憶でも、響児の人生の中では幸福に包まれた、暖かな時間だったのだ。忘れか

けたのなら、思い出せばいい。そうすれば、この無価値で怠惰な時間耐える事が出来る。

そう思えば、先ほどの三沢への仕打ちに対する後悔も、つまらない日常を繰り返す苦痛からも逃げられた。それはつかの間の幸福になって、響児の硬い表情を幾分か和らげ、ほんの少しの微笑みをもたらした。その瞬間、

「楽しそうだねえ？」

ふいに背後から軽快で気さくな声が響いた。顔から微笑を消し去ると、響児は声のした方へ振り返った。

そこには一人の男が立っていた。長い黒髪と派手なピアスに、六月だというのに両腕両足を覆うタキシードで身を包んでいる。一見するとホスト風。そんな軽薄な格好だった。

「なんだよ？ いきなり」

精一杯の虚勢を張って響児は男を見る。そしてある事に気づく。男はとても美しい顔をしているのだ。ホストなどの安っぽい顔ではない。まるで彫刻の様に整った、それでいて凛々しい顔立ち。

どこかの美術館の作品が意思を持って動いているかの様な、そんな印象を与える程、美しい男だった。

そんな男を見て一瞬響児は言葉を失う。そんな彼に男は尚も人懐っこいような口調で語りかけた。

「楽しそうだねえと思ってさ。おたく、ニヤついてたでしょ？」

「俺が楽しそうだと、あんたになんか関係あるのかよ？」

「大有りなんだよね。それがさ」

その声が届いた瞬間、響児の首が物凄い力で圧迫された。呼吸が満足にできなくなり、目の前が真っ白になる。そんな状況で再び男の声が響いた。

「人間が楽しそうだと、イラつくんだよね。なんかさ、脳味噌を掻き毟られるっていうか、心臓を鷲掴みされるっていうか、そんな感じで……とにかく不愉快なんだよ」

（何を言ってるんだ？ コイツ？）

男の言っている事は何一つ理解できなかった。薄れゆく意識を懸命に保って、必死で目の前の男の姿を見た瞬間、響児は凍りついた。

男の美しい顔の左半分は何かで覆われていた。幾何学模様を思わせる灰色の。そして、異様なのは顔だけではない。響児の首を万力のような力で締め上げている左腕も明らかに異質な物だ。タキシードの袖は無く、顔の左半分を覆っているのと同じ醜い模様が浮かび、響児の首を締め付けるのは昆虫を思わせる指が歪な長さで揃った掌だった。

（なんだよ？ コイツ？）

全く理解が出来なかった。目の前の男が何なのか、何故自分が襲われるのか、何一つ分からずただ混乱する。そんな響児に男はあくまで親しげな口調で話しかける。

「ここじゃ他の人間が来るかもしれないし……場所移そうか？」

その言葉が耳に届いた瞬間、響児の身体はありえない速さで放り出された。地面に着地したかと思うと、雑多なガラクタに何度も身体をぶつけながら転がっていく。全身を襲う痛みに苦しみ間もなくコンクリートの壁らしき物に勢いよく激突し、響児の身体はやつと停止した。

身体を打ち付ける痛みに耐えながら、鼻腔に入ってくる生ゴミの臭いを嗅ぐ事によって、自分が雑居ビルの隙間に放り込まれた事実を、響児はなんとか認識した。

「ここから……逃げないと」

とにかく、それしか思い浮かばなかった。激痛が襲う全身に必死で力を込め立ち上がろうとした瞬間「逃がさないよ」と再び男の声がすると同時に、首を凶悪な力でつかまれて響児の身体は宙に浮いた。

「人間痛めつけるのは久しぶりなんで、もうちょっと楽しみたいけど、さっさと用事を済ませとけ、って言われてるからさ」

相変わらずの親しげな声。苦痛に喘いでいる響児に対する罪悪感

は感じられなかった。響児は全身を覆う激痛と、首をつかまれ宙吊りにされている苦しさで、男の声を認識するのが精一杯の状態だった。

「じゃあ行こう……」

男の言葉が途中で寸断されると同時に、響児の身体は宙吊りから開放され、コンクリートの地面に落下した。

そして再び襲う激痛に耐える響児の目に映っていたのは、この世の物とは思えない醜悪な肉塊と、その向こうに立っている、陽光を思わせる金色の髪をたなびかせ、真紅の装甲服を身に纏った、美しい少女の姿だった。

「それにしてもあなたが私達の『創造主』？ 貧相な顔ね……」

そう言って少女が響児を見る目は、何処と無く冷めたものだったが、自分の一張羅の顔を貧相と呼ばれた憤りも、少女の視線に対するイラつきも響児の心には起きなかった。

あるのは只一つの疑問。俺が創造した物語？

少女の放った幾つもの言葉の中から、一つを選び考える。心当たりは一つしかない。

——響くんってお話が書けるんだ。凄いのね

先ほどから何度も思い出していた懐かしい声が頭に響く。そう。

響児は一つの物語を書いた。

一冊のノートに書かれた、たった一人の『読者』しかない、小さな物語。

そして少女の言葉によれば少女も醜悪な化け物も、響児の書いた物語の登場人物だという。

「えっと……君やこの化け物は俺が書いた物語の登場人物で……じゃあ何？ 俺の物語の中から抜け出して来たって……わけ？」

自分の口に出してみて、改めて自分が置かれている状況の奇妙さ

を実感した。ありえない。あまりにも現実から飛躍しすぎている。そもそもどうやったらそんな状況が出来る？ 夢か幻か精神に異常をきたしたか。この三つでしかこんな体験できない。

だが、全身を走る痛みと、喉を支配する息苦しさが夢や幻を否定していたし、病院の類にやっかいになった覚えも急にそうなる前兆にも心当たりは無かった。ならば今の状況は現実ということになる。そうやって賢明に思考する響児に、じれったそうに少女が語りかける。

「そうなるわね」

響児はその目を覗き込んで見る。その美しい色は相変わらず現実離れしているが、目つきは真摯なもので、嘘を言っている様子はなかった。その瞳を見つめ、少女の言葉を反芻し、今までの状況を冷静に分析し、響児は一つの答えを導き出した。

「ドッキリだろ？ コレ」

そうだ。あるわけがない。こんな事はない。バラエティ番組とかの手の込んだ企画だ。ドッキリだ。響児はそう結論付け、そしてそれを裏付けるべく一気に捲くし立てる。

「いや、なんつーかさ、手え込んでるよな。最近のドッキリも特撮も。ほらこの手の番組って三流芸人だとか、売れないグラビアアイドルだとかが出るじゃん。けど君みたいな綺麗なアイドル使ったから、相当金も掛かってるんだろ。だけど普通エキストラにこんな手荒な事しない……あ。ってことはさ。治療費はもろろん、出演料だってかなりの額が出るん……」

「……これが現実だって理解できてないのね」

自分に起こっている状況を虚構だと決めつける響児の言葉を遮り、少女は呆れた様な眼差しを響児に向けた。

「特撮だのドッキリだのって言葉の意味、私には分からないけど、要するに私があなたを騙してる、そう言いたいんだ。呆れた。いくら世界が違うからといっても、ここまで痛めつけられればそれなりに理解出来そうなものなのに」

そこまで捲くし立てると、少女は軽くタメ息を付く。そして響児に覆いかぶさるようにしていた身体をどけると、自分の背後を指差した。

「疑うならもう一度確かめてみたら？ そろそろ動き出すわよ」

少女の指差した先では、件の肉塊が相変わらずピクピクと蠢いていたかに見えた。だが両断されたそれは確実に、ゆっくりとだがその動きを大きくしていた。

「ま、まだ動いて……」

響児が怯えた声を上げた瞬間、肉塊はバネ仕掛けの玩具の様に勢いよく跳ね上がった。そして、奇妙にねじれた動きで響児と少女の方へと身体を向けながら立ち上がる。その姿を見て、またしても響児は驚愕する。化け物の両断されたはずの胴体は少し歪だが、醜く爛れた傷口を残しながらも再び一つになっていた。

もはや響児に疑うという選択肢は無い。テレビの作り物などでは決してない、明らかにこの世界に有るべきではない存在。それが目の前の化け物だと信じるをえなかった。

「しぶといのね」

怯える響児とは対象的に、瀕死の害虫でも見るかのように淡々と喋っていた。そしてそれとは対照的に化け物は激情に駆られた言葉を発する。

「テメエ、いきなり後ろからかよ。あともう少して『創造主』を……」

そんな化け物の言葉を無視して、少女は何者かに向って語りかけた。

「お願い。もう一働きして頂戴」

その瞬間、響児の眼前に頭上から何か巨大な影が振って来る。それはまたしても彼の常識の範疇に収まらない特異な存在だった。

全身にボロボロの黒い布を纏った、3mはあろうかという巨大な人の形をした何か。いや、人の形というのは不適切だった。

両足は無く、人型の均衡を欠いた巨大な両腕を持ち、宙にいてい

る。人の形をしていないのだ。特異なのはそれだけではなかった。ボロボロの布から見える頭部や身体や腕にはぎつしりと歯車やワイヤーが詰まっている。それも機械のように理路整然というわけではない。ただ無造作に詰め込まれている。そう表現した方が正しい。ガラクタで作られた歪な機械人形。それが響児の前に現れた新たな脅威を現すべき言葉だった。

「ま、また増えたのか？」

「味方よ。あんな醜い『歪』^{ノイズ}なんかと一緒にしないで」

奇妙な機械人形に怯える響児に少女はそう説明した。その言葉を裏付けるべく、化け物、先ほどの少女の言葉によると『歪』^{ノイズ}というらしきそれは、機械人形に向って怒号を飛ばした。

「『巫女の人形』かよ……不意打ちするってことは、よっぽど俺が怖かったのかあ？」

怒りと挑発が混ざった『歪』^{ノイズ}の言葉に対して、機械人形は何も答えなかった。ただ宙に浮かび、少女と響児を背にしている。まるで二人を守るかのように。そして、機械人形の代わりに少女が嘲笑じみた口調で『歪』^{ノイズ}に答える。

「何？ 正々堂々とも言いたいわけ？ 『歪』^{ノイズ}のクセに」

少女の笑みには『歪』を恐れている様子は全く無い。むしろ『歪』^{ノイズ}に対する嘲笑すら感じられた。

「何が言いたいんだ？ ああ？」

少女の言葉に刺激されるかの様に、『歪』^{ノイズ}の言葉は苛立ちを含ませていく。

「飲み込みが悪いわね。ちょっと後ろから切られたぐらいで、そんなに怒るのが馬鹿らしいって事よ。いい機会だから教えてあげる。

どんな理不尽な仕打ちを受けても、あなたには苦しんだり怒ったりする権利なんて無いの。だって……」

その瞬間、響児は見た。美しい少女が『歪』^{ノイズ}をさらに貶めるために、ほの赤い唇から呪いの言葉を吐くのを。

「『歪』^{ノイズ}はこの世で最も愚かで醜い存在なんだから」

その言葉は嘲笑とでも言うべきもの。だが少女の顔には嘲笑する者の余裕は微塵も感じられなかった。

あるのは憎悪。眼前の異形、^{ノイズ}『歪』に対する恐ろしいまでの激情。その存在を侮辱された^{ノイズ}『歪』は耳を劈くかのような絶叫を上げると、何かが破裂する様な激しい音を立てながら、響児達目掛けて跳躍する。その刹那、工具箱をひっくり返した様な激しい金属音が鳴り響いた。

怒涛のごとく押し寄せ、非現実の連続に感覚が麻痺したのか、響児は目をつぶることが出来ず眼前の光景が嫌でも目に入った。

自分の首を締め上げていた^{ノイズ}『歪』の左腕は、いつの間にか歪な弧で描かれた巨大な鋏状に変わり、機械人形の頭部と思われる部分の少し左に食い込んでいる。破壊はそれだけでは終わらなかった。食い込んだ左腕は耳障りな金属音を立てながら機械人形を縦に切断していく。そして機械人形の腰らしき箇所まで食い込むとその動きを止めた。

その^{ノイズ}『歪』の破壊に対して、機械人形は全く対抗できなかった。小刻みに痙攣したかと思うと、^{ノイズ}『歪』の左腕で切断された箇所、左半身がだらりと垂れていき、やがて宙に浮いたまま動きを停止した。そして残骸となった機械人形の上で^{ノイズ}『歪』が歓喜の声を上げる。
「なんだよ！ 全然たいしたことねえじゃねえか！ ハハッ、やっぱり俺に敵わないから後ろからってか？」

勝ち誇った口調の歪みに対して、少女は何も答えなかった。代わりに^{ノイズ}『歪』はさらに饒舌になっていく。

「なんだ？ 観念したってか？ そうだよなあ。他の手下もないみたいだしな。ハハ、ツイてるぜ。『創造主』と一緒に『巫女』まで手に入れば、俺は……」

その瞬間、機械人形が先ほどの^{ノイズ}『歪』と同じ様に、弾かれたような動きで、左右に裂かれた身体を元に戻した。

「なっ？」

^{ノイズ}『歪』が気付いた時には手遅れだった。彼は裂かれた機械人形の

身体が元に戻ろうとするその動きに巻き込まれ、もはや声と言えぬ様な絶叫を響かせた。

「さようなら。醜い『歪』」^{ノイズ}

少女の言葉と同時に機械人形にも異変が起こる。かすかにだが、キリキリと機械の作動音の様な物がその身体の各所から聞こえたのだ。そして身体の各所に無造作に詰め込まれた機械部品たちがゆっくりと動き出す。

『歪』^{ノイズ}が機械人形に切りかかる一連の動きの激しさに付いていけず、止まっていた響児の思考は、両者が動きを止めた事で息を吹き返した。そしてそれが目の前の光景の答えを出す前に、『歪』^{ノイズ}の悲痛な叫びが響いた。

「お、おいまさか？ 嘘だよな？ やめ……」

そこで響児はやっと理解できた。機械人形の体中に詰め込まれている、機械や金属部品が動きだす。ということは、その中に閉じ込められている『歪』^{ノイズ}は……

これから起こる凄惨な光景を想像し、響児は思わず目をつぶる。そして耳を塞ごうとしたが手遅れだった。

まるで巨大なスクラップ工場の真っ只中に放り込まれたこのような錯覚を起こす、凄まじい金属音が響く。微かに『歪』^{ノイズ}の断末魔の声らしきものが聞こえたが、それもすぐに消え、代わりに骨が砕ける無機質な音と、肉が裂かれる生々しい音が金属音と同時に響いた。やがて、破壊のオーケストラはゆっくりとその演奏を静めていった。そして、響児は恐る恐る目を開く。

思ったより残酷な光景ではなかった。辺りには『歪』^{ノイズ}だったと思われる肉片が散らばってはいたが、どれも微細な大きさに切り刻まれているため、それこそ肉屋で売っている牛や豚の肉と判別が付かなかった。

もしも肉片が臓物や脳と言った生理的嫌悪感を及ぼす箇所と判別出来る大きさだったら、響児は嘔吐していただろう。

一方、雑多な機械部品で作られた自身の身体で、『歪』^{ノイズ}を肉片へ

と変えた機械人形は、その代償として全身を『歪』の血で濡らしながら、先ほどの動きが嘘のように静かに浮かんでいた。

『歪』と機械人形、両者の現状を確認すると響児はこの場に居合わせている最後の一人、即ち、『歪』に『巫女』と呼ばれ、響児が書いた物語の登場人物だと言い張る金髪の少女に目を向ける。

多少の血、おそらく『歪』のものと思われるものが付着している真紅の走行服を身に纏った少女の横顔には、先ほどの『歪』に対する嘲笑は無かった。

あるのは憎しみ。その存在が消滅した『歪』に対して未だに、ドス黒い怒りを抱いている。響児の目にはその様に映った。

「嬉しくもなんともない……」

少女はぼそりと呟いた。

「『歪』を、私達が最も憎むべき存在を殺したのに、全然嬉しくない。ただ憎しみが残るだけ」

そこまで言うと、少女は響児を見据えて言い放った。

「この気持……分る？ ただひたすら『歪』を憎むだけの」

「な、そんな、分るわけ……」

とっさの少女の問いに響児は口ごもった。そんな響児を少女は小馬鹿にしたような目で見つめている。そしてゆっくりと言葉を紡いでいく。

「それにとっての喜びは人間の苦痛」

ゾクリとするような少女の冷徹な声が響く。

「それにとっての音楽は人間の悲鳴」

少女がなおも続ける言葉に、響児は言いようの無い感覚を覚える。そして少女の言葉は続く。

「それにとっての馳走は人間の死肉」

（ああ、そうか）

少女の言葉が放たれるたびに、自分の中の言いようの無い感覚が少しずつ払拭されていくのを響児は感じていた。

「それにとっての希望は人間の絶望、それは『歪』。人の安寧を脅

かすもの」

その言葉でをの覆っていた感覚の正体が分った。少女が紡ぐ呪いの言葉に響児は既視感を覚えていたのだ。なぜなら、

「それ……俺が書いた事だ……」

ぼつりと呟いた響児は完全に思い出していた。自分が書いた物語で、ただひたすらに人間を苦しめる邪悪で醜悪な存在、『歪』^{ノイズ}を物語の中で創造した事を。

「そう。『歪』^{ノイズ}はあなたが創造した」

そう言う少女はビルの壁にもたれかかっている響児に近づくと、さらに年に相応しくない美しさと険しい表情の顔を響児に近づける。

「私達の世界では『歪』^{ノイズ}によって、数え切れないぐらいの人達が玩具のように命を扱われて死んでいった……そんな地獄の様な世界の『創造主』は……あなたなのよ」

少女は一気に捲くし立てると響児から離れ、再び立ち上がり彼を見下ろした。

少女の迫力に気圧されて混乱した思考の中で、響児は賢明に物語の記憶を探る。認めたくなかった。自分が少女の言う様な地獄の様な世界の物語を創造した事を。

そうしてそれを否定する為、一つの言葉にたどり着いた。物語の唯一の読者の言葉に。

——響くんのお話大好きよ。だってこんなに優しい物語だもの。

「違う！ あいつは、物語を読んでくれたあの娘は、優しい物語だっ
て言ってくれ……」

「けど私が物心付いた時から世界は地獄だった！」

響児の賢明の反論も少女の怒号に掻き消された。

「いい加減認めたらどう？ あなたは私達の世界を創造した。あなたにとってはまだ自分が書いた物語だったとしても、私達にとっては生きるべき世界なのよ。例えばそこが地獄でもね」

少女の言葉は憎悪に近かった。その激しい感情を直視するのが辛くて、響児は少女以外の物に目を向ける。

最早何一つ原型を留めていない、『歪』^{ノイズ}の肉塊。そして『歪』^{ノイズ}を無慈悲に斬殺し、目とおぼしき虚ろな空洞で響児を見つめる機械人形。どれも響児をこの狂った現実から開放してくれなかった。

そして再び少女に目を向ける。

「だけど、私達の世界を救う方法が一つだけある。そう、あなたが書いた物語……」

「止める！ もう沢山だ！」

思わず響児は叫んだ。

「もうこれ以上……」

アイツとの思い出を汚さないでくれ。

その願いも空しく、少女の言葉は響児の思い出にとどめをさした。

「『創造のルアンレーネ』をあなたが修正する事によってね」

それが限界だった。

『創造のルアンレーネ』。それは物語の題名であり、響児が『読者』と過ごした幸せな時間を象徴するべき言葉でもあった。

だがその物語に生きる人々、眼前の少女にとっては、自分の創造した『歪』^{ノイズ}によって人々が無残に殺される地獄の様な世界。

それを認識した瞬間、読者と一緒に物語を通して過ごした暖かで大切な思い出が汚される様な感覚を響児は感じた。

「違う。俺とアイツの物語は地獄なんかじゃ……」

賢明に読者との暖かな思い出を、読者がかけてくれた言葉を思い出そうとする。

だが、いくら考えても何も思い出せなかった。変わりに再生されるのは、醜悪な『歪』と機械人形の凄惨な戦い。そして、少女が自分に向ける憎悪の眼差し。

それらはまるで底なし沼の様に響児の意識を飲み込んでいく。そ

れでも響児は賢明に記憶を探す。『創造のルアンレーネ』が地獄の世界で無いと言うことを証明する記憶を。

だが、いくらもがいてもそんな記憶は見つからなかった。

そうしている内に、立て続けに起こった非現実の連続で疲弊しきった響児の精神は、徐々に混濁していき、満足に思考できなくなっていた。

（俺の、俺とアイツの物語は……）

それを最後に、響児の意識は完全に途絶えた。

一、覚え無き物語（後書き）

初めまして。多槍和時と申します。

プロのライトノベル作家を目指して、試行錯誤を重ねてきましたが、やはり多くの方に拝見していただいて感想をもらいたくなり、今回投稿するに至りました。

まだまだ未熟な作品ですが、どうかよろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8406x/>

破壊のルアンレーネ～全ての物語はスベテノセカイ～

2011年10月23日04時16分発行